

「ガリラヤ」

ヨハネの福音書 1:43～51

1. ガリラヤ

1:43 その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされた。そして、ピリポを見つけて「わたしに従って来なさい」と言われた。

イエシュアがバプテスマのヨハネの前に現れた後、すなわちイエシュアの上に、御霊が鳩のように降りて来られ、とどまられた後に向かう先がガリラヤ(גליל)です。ガーラル(גלל)「ころがす、ゆだねる」という意味の言葉が語源になっていると考えられます。御霊の力を帯びられたイエシュアは、このガリラヤからすべての働きを始められます。なぜガリラヤなのでしょう。その理由をこのガリラヤという名の語源であるガーラルから探してみたいと思います。まずこの言葉が聖書で最初に使われるのが創世記の 29 章の出来事です。

創世記

29:2 ふと彼が見ると、野に一つの井戸があった。そしてその井戸のかたわらに、三つの羊の群れが伏していた。その井戸から群れに水を飲ませることになっていたからである。その井戸の口の上にある石は大きかった。
29:3 群れが全部そこに集められたとき、その石を井戸の口からころがして、羊に水を飲ませ、そうしてまた、その石を井戸の口のもとの所に戻すことになっていた。

アブラハムの子、イサクの子、ヤコブは、長子の祝福を奪ったために、兄のエサウに命を狙われます。故郷であるカナンを地を追われたヤコブは、母リベカの実家であるハランの地に、リベカの兄ラバンを訪ねます。そこでヤコブは一つの井戸にたどり着きます。その井戸には一つのルールがありました。井戸には普段大きな石でふたがしてあって簡単に開けることができません。ですからその井戸から水を飲むすべての羊の群れが集まってからその大きな石のふたを「ころがして」一緒に水を飲んでいたようです。ヤコブがこの井戸を訪れた時、すでに三つの群れが集まっていましたが、残る一つの群れがまだ到着していなかったため、ふたは閉じられたままでした。

創世記

29:8 すると彼らは言った。「全部の群れが集められるまでは、そうできないのです。集まったら、井戸の口から石をころがし、羊に水を飲ませるのです。」

この出来事で強調されていることは「群れが全て集まった時に石のふたをころがす」ということです。つまり「全ての群れが集まる」ことと、石のふたを「ころがす」こと、すなわちガーラルが結びついているわけです。イエシュアがこの地上に来られる目的は、「御国」を建て上げることですが、それはすなわち「御国」の国民となる者すべてを、ひとり残らず集めることです。

またこのガーラルの名詞形ゲラール(גלל)という言葉が、エズラ記の中で建築用語として使われています。

王にお知らせいたします。私たちはユダの州に行き、あの大いなる神の宮に行ってみましたが、それは大きな石で建てられており、壁には木材が組み込まれていました。その工事は彼らの手で着々と進められ、順調にはかどっています。(エズラ 5:8)

「大きな石で建てられて」という部分は、直訳では「大きな石を移して建てる」となっていて、ここにゲラールが使われています。神の家である「御国」を、天から「移して」地に建てる、それがイエシュアの目的であることをゲラールという言葉は物語っていると考えられます。

しかしもう一つ、ゲラールと同じ綴りで、全く別の意味を持つ言葉があります。それはゲラール(גֵּרָלַר)、訳すと「糞、こやし」という言葉です。この当時、家畜の糞は乾燥させて、燃料として用いられていました。つまり「燃やす、焼き尽くす」という概念を持っているのです。

だから、見よ、わたしはヤロブアムの家にわざわざいをもたらず。ヤロブアムに属する小わっぱから奴隷や自由の者に至るまで、イスラエルにおいて断ち滅ぼし、糞を残らず焼き去るように、ヤロブアムの家のあとを除き去る。(列王記 I 14:10)

イエシュアが「御国」を建てるとは、ヤロブアムがイスラエルに偶像礼拝を強要した罪に象徴される、神様に聞き従わないすべての者を、残らず除き去ることでもあります。

このように、ガリラヤという名前には

- (1) 御国に入るべき全ての民を集める
- (2) 神の家を天から地に移して建てる
- (3) 神に聞き従わない全ての者を除き去る

という意味があると考えられます。

因みに、箴言や詩篇にこのような御言葉があります

あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。(箴言 16:3)

この「ゆだねよ」もゲラールです。神様のご計画が決してゆるがないものであること、必ず実現するものであることを、イエシュアはガリラヤから宣教をスタートさせることで、それを表したかったのではないかと思います。

2. ベツサイダ

1:44 ピリポは、ベツサイダの人で、アンデレやペテロと同じ町の出身であった。

ベツサイダ(בֵּית צִיְדָה)、この地名にも意味があります。「漁師(獵師)の家」という意味があり、エレミヤがこのように預言しています。

見よ。わたしは多くの漁夫をやって、——主の御告げ——彼らをすなごらせる。その後、わたしは多くの狩人をやって、すべての山、すべての丘、岩の割れ目から彼らをかり出させる。(エレミヤ 16:16)

イエシュアの 12 弟子、その半数以上がガリラヤの漁師です (ヨハネ 21:2)。これは偶然ではありません。この預言が成就することを示す、すべては神様のご計画の成就を指し示す型なのです。

3. ナザレ

1:45 彼はナタナエルを見つけて言った。「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。」

モーセの律法の中に表された人、それがイエシュアです。律法とは、決して命令と禁止の事項ではありません。旧約の預言者たちがメシアを預言して記したように、律法もまたイエシュアを指し示すものなのです。

1:46 ナタナエルは彼に言った。「ナザレから何の良いものが出るだろう。」ピリポは言った。「来て、そして、見なさい。」

ナザレ人イエシュア。このナザレ(נָצְרֶת)という地名にも意味があります。「芽、若枝」という意味の言葉ネーツェル(נֶצֶר)から由来していると考えられ、このネーツェルが聖書で最初に使われる箇所が、イザヤの預言です。

イザヤ

11:1 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。

エッサイとはダビデの父親の名前です。ですからこの新芽はダビデを指し、そして「若枝」と訳されているのがネーツェルです。つまりネーツェルは「ダビデの子」、このダビデの子という表現はメシアを表す別称です。そのダビデの子であるイエシュアが、どのようなお方で、どのような働きをしていくかが、この後の御言葉に記されています。

11:2 その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。

「その上に、主の霊がとどまる」御霊が鳩のように降ったと、バプテスマのヨハネが見たイエシュアが記されています。

11:3 この方は主を恐れることを喜び、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、

11:4 正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。

この預言は「御国」の王としてのイエシュアを表しています。

11:6 狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。

11:7 雌牛と熊とは共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。

11:8 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。

11:9 わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。

イエシュアが王となる国、メシア王国、千年王国と呼ばれる「御国」の様子が描かれています。

11:10 その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。

11:12 主は、国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。

イエシュアによってユダヤ人が世界中から集められる、それによって「御国」が形成されることが、ここにもはっきりと記されています。

4. ナタナエル

1:47 イエスはナタナエルが自分のほうに来るのを見て、彼について言われた。「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りが無い。」

このナタナエル(נְתַנְאֵל)という人物の中に、「本当のイスラエル、これがイスラエルだ」と言わしめた真理が表されています。まずこのナタナエルという名前ですが「与える、置く」を意味するナータン(נָתַן)と神様を表すエール(אֵל)が合わさった名前です。「神は与える、神が置く、据える」という意味があります。つまりイスラエル人、ユダヤ人とは、神様のご計画のために、この地上に「神様ご自身が与えた民」、「神様がこの地上に据え置かれた民」だということです。

そしてこの本当のイスラエルには「偽りが無い」とありますが、ここで使われているヘブル語はレミッヤー(רְמִיָּה)で「たるみ、無精、欺き、怠け者、おろそかにすること」などの意味があります。本当のイスラエルとはレミッヤーではない、つまり「神様の期待を裏切らない、忠実な者たち」であると考えられます。

5. いちじくの木の下

1:48 ナタナエルはイエスに言った。「どうして私をご存じなのですか。」イエスは言われた。「わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです。」

ナタナエルがいちじくの木の下にいたことにどんな意味があるのでしょうか。ミカ書とゼカリヤ書にこのような預言があります。

彼らはみな、おのおの自分のぶどうの木の下や、いちじくの木の下にすわり、彼らを脅かす者はいない。まことに、万軍の【主】の御口が告げられる。(ミカ 4:4)

その日には、——万軍の【主】の御告げ——あなたがたは互いに自分の友を、ぶどうの木の下といちじくの木の下に招き合うであろう。」(ゼカリヤ 3:10)

これは「御国」の完成による永遠の平和を表現した言葉です。つまりナタナエルという名前に表された本当のイスラエル、神様がご自身の計画のためにこの地上に与えた、据え置かれた民が、いちじくの木の下で仲良く集まり、交わるような、そんな平和で安心して暮らせる世界、それが「御国」であることを表して言われたのだと考えられます。またいちじくの木に関してこのような記述もあります。

マタイ

24:31 人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。

24:32 いちじくの木から、たとえを学びなさい。 枝が柔らかくなって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。

24:33 そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。

「いちじくの木から、たとえを学びなさい」とあるように、いちじくの木は季節の移り変わりを顕著に表す植物のようです。つまりいちじくの木によって季節を知るように、御国が近づいている、時が近づいていることを知りなさい、という意味です。つまりナタナエルに表された「いちじくの木の下に座る者」とは、神様のご計画が完成する時「御国が到来するその時」を待ち望む者を表していると考えられます。

1:49 ナタナエルは答えた。「先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」

そしてその「御国」の王とは神の御子、イエシュアであることが、ナタナエルに表されるほんとうのイスラエルが告白することが重要であることがここに示されていると思われま

6. 天のはしご

1:50 イエスは答えて言われた。「あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、とわたしが言ったので、あなたは信じるのですか。あなたは、それよりもさらに大きなことを見ることになります。」

1:51 そして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます。」

「天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りする」このしるしは、創世記で神様がヤコブと交わした約束を想起させるものだと考えられます。

創世記

28:12 そのうちに、彼は夢を見た。見よ、一つのはしごが地に向けて立てられている。その頂は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしている。

イエシュアがナタナエルに語られたと同じ出来事がここに記されています。この箇所には、「見よ」と聖書が命じているものはいくつかあります。それらをじっくりと見る必要があります。まずは「一つのはしご」です。はしごは地の上にしっかりと立てられています。そしてその頂は天に届いています。これは天と地が「一つのはしご」によって一つにつながることを示しています。このはしごは一方通行ではありません。「見よ」とあるように、そのはしごは上ったり、下りたりできるはしごです。つまり完全につながっているのです。このように、神様のご計画は「天と地を一つにする」という壮大なものです。だからイエシュアは、イスラエル人たちがいちじくの木の下で平和に暮らすこと「それよりもさらに大きなこと」と言われたのです。

7. イスラエルの上に

28:13 そして、見よ。【主】が彼のかたわらに立っておられた。そして仰せられた。「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしはあなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫とに与える。

さらに「見よ」とあるように、決して無視してはならない事実があります。それは主が彼、すなわちヤコブ、後のイスラエルのそばに立っておられるということです。正確には「そばに」ではなくアル(על)というヘブル語が使われていますので、その意味は「~の上に」です。私たちの主は、「イスラエルの上に立っておられる御方」です。先ほどの天と地を一つにするはしごもまた、このイスラエルの上に立てられていることを覚えなければなりません。

そして「あなたが横たわっているこの地」とあるようにヤコブは眠っているのです。後述で彼は「主がこの所におられるのに、私はそれを知らなかった」と言っています。ヤコブはその時、自分が眠っていたその場所にベテル(בֵּית־אֵל)、訳すと「神の家」という名前をつけますが、それまではその場所はルズ(לֹז)という場所でした。ルズは訳すと「そらす、曲がった、ひねくれた」という意味です。イスラエルの子孫、ユダヤ人たちは今日に至るまでまさにルズの状態です。神様のご計画から目を「そらし、曲がった」考え方でそれを捉えているのです。しかし眠りから覚めたヤコブが気づいたように、ユダヤ人たちの目が開かれる時が来ます。その時ルズはベテル「神の家」すなわち「御国」に変えられるのです。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西、東、北、南へと広がり、地上のすべての民族は、あなたとあなたの子孫によって祝福される。

地上のすべての民族、全人類はイスラエルの子孫、すなわちユダヤ人によって祝福される、これが神様が決められた、全人類を祝福する方法です。因みに「祝福する」とは、ヘブル語でバーラフ(בָּרַךְ)と言います。

ベート(ב)…家を象った象形文字です。神の家、すなわち「御国」を指し示す文字です。

レーシュ(ר)…頭を象った象形文字です。かしら、思考を意味します。

カフ(כ)…手のひらを象った象形文字です。受け取る、捉える、適用する、という意味があります。

これらの意味を組み合わせるとバーラフ「祝福」とは「御国を思い、受け継ぐ」と解釈することができます。神様の祝福とは、私たちが御国に住まわせることなのです。私たちが一般的に考えている神様の祝福は、

健康面や安全面、経済面など、様々な生活に関する必要が満たされることを指しますが、この「御国」の中に、私たちが求めるそのすべてがあるのです。だからイエシュアはこう言われるのです。

だから、**神の国**とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。（マタイ6:33）

求めると言っても、ただ「ください、ください」と言い続けることではなく、「御国」とは何か、神様のご計画とはどのようなものなのかを知る、学ぶ、考えることが重要です。